

子どもがよく育つ総合学習

国立教育研究所 奈須正裕

このところ総合学習の授業をたくさん見た。そんな中で、どうも子どもがよく育っている総合学習には、学年や領域や活動を越えて共通した特徴があるのではと思うようになった。

まず、いかにも教師なり大人では思いつきそうもない活動なり視点が含まれていること。子どもの求めや問題意識から学習を組織すると、どうしてもそうなるのだろう。10年以上前に、古タイヤに乗ったクラス全員が手をつないで体育館の端から端までころがるという実践を見たが、こんな活動を思いつく教師がいるだろうか。担任自身は、タイヤに土を入れて作物を育てる「タイヤ農園」構想をもっていたが、子どもたちの意識はそちらへは向かわず、タイヤ乗り遊びへ、さらには40人のタイヤ乗りへと流れた。私たちはまだまだ子どもを知らない。総合学習を契機に子どもの意識に徹底して寄り添い、実践を通しての子ども研究をさらに進めたい。総合学習のカリキュラムとは、そのような実践経験の莫大な蓄積と交流の上によりやく形成できるものではなからうか。

第2に、科学的・文化的追究を伴うこと。子ども中心で単元を構成していくと、科学的・文化的な深まりが生じず「追い回ってしまう」という人があるが、それは子ども中心という意味を取り違えているのである。子どもたちが「本当に」やりたいことを「ちゃんと」やろうとすると、必ずその手段として科学的・文化的な知識や技能が必要となる。もし深まりがないとすれば、その活動は「本当に」やりたいことでは

ないか、「ちゃんと」やっていないかのいずれかである。「タイヤ乗り」の実践でも、子どもたちは「1個では安定しない」「2個のタイヤをつなげたい」と言い出した。ところが、正確に2個のタイヤをつなぐためには、円という図形の特徴を知る必要が出てくる。それどころか、スパイクタイヤのスパイクを抜くために、子どもたちはテコの原理を応用した工具を金属加工までして創り出してしまった。7歳児とは、かくも強靱な探究力を持っているのである。

第3に、教師も楽しんでいること。教師も41人目の追究者として子どもたちと同じ地平に立ち、活動に没入していると、自然とそうなるのだろう。逆に「私が何かを教えねば」と思っていると、心から楽しめない。「タイヤ乗りなんかして、これじゃ学習にならないじゃないか」とあせると、さらに苦しくなる。ついには、喜々として活動している子どもを見ても「こっちは胃をキリキリいわせて苦勞しているのに」と腹さえたってくる。まるで「私が教えねば」という教師の“業”が引き起こす“地獄”である。本人は子どもの追究を支援しているつもりだが、“業”のせいで子どもの追究の筋道が見えなくなり、かえって邪魔や妨害になっていることも多い。「追究するのも子ども。成長するのも子ども。私もいっしょに追究させていただける。成長させていただけるとはなんとありがたいことだろう」という平安な心持ちとともに活動を楽しむことが、総合学習の、いや子育て全般の基本ではなからうか。

全国個性化教育連盟学期研究会
「総合学習の考え方・進め方」Part Ⅲ

【期日】平成9年11月22日(土)

【会場】東京 上智大学6号館

今回の学期研究会は、具体的にどのように総合学習に取り組めばよいのか等について、以下の日程で先進校の先生方を中心に、実践に即した研究・研修が行われてた。

【日程】

◎開会行事

◎分科会

- 小学校分科会A(教科総合型)
- 小学校分科会B(トピック、興味関心型)
- 中学校分科会

◎講演

- 「新しい教育課程と総合学習の可能性」
お茶の水女子大学教授 無藤 隆先生
- 「総合学習をどのように展開したらよいか」
愛知県大府中教頭 成田 幸夫先生

◎まとめ

上智大学教授 加藤 幸次先生

◎閉会行事

分科会

○小学校分科会A(教科総合型)

協力校

愛知県東浦町立緒川小学校 (小山 儀秋)
東京都台東区立根岸小学校 (中川 修一、
早坂ひとみ、藤森克彦)

助言者

高浦 勝義 (国立教育研究所室長)

司会

等々力 美津子 (東京・台東区立谷中小)

小学校分科会Aでは、教科総合型の総合学習を研究している愛知県の緒川小学校と東京都の根岸小学校の2校の提案があった。

2校とも全国的に有名な研究実践校ということで内容的にも重みのある提案だった。

緒川小は、単元の計画段階で、始めに内容ありき、教師がおよその枠組みを決めてはいけない。できるだけ子供の気持ちを生かすようにすべきだ。と豊富な経験をもとに提案した。

根岸小は、子供を研究の中心にすえ、今まで研究してきた一人学習の上に、「個と個のかかわり」「教科というわくが自然なものであるか」「育てたい資質・能力」を前提に総合学習を構築しているというものであった。

2校とも現行の教科の枠について課題を投げかけるものであった。

(太田 始・東京)

○小学校分科会B(トピック、興味関心型)
協力校

埼玉県草加市立高砂小学校 (多田信夫)

神奈川県小田原市立大窪小学校(廣田 始)

助言者

奈須 正裕 (国立教育研究所主任研究員)

司会

堀竹 蝶子 (東京・八王子市立みなみ野小)

両校の実践報告を聞き終わって感じたことは、どちらも子どもをまず中心に据えて、学校の教育計画を考えているということであった。

高砂の実践の一番の中心が、どのようにして総合学習の時間を生み出したか、ということである。まず、教科書会社から来る年間計画作成例にとらわれないで、各教科の時数の調整を行い、また、行事の精選も平行して行うことで、年間20時間程度確保した。また、花梨ジャム作りなどの実際の活動を紹介して、子どもの現在から出発する学習を進めていくことで、総合学習を構築していくという実践の紹介をしていただいた。

一方の大窪小は、校舎の改築を契機として、目の前の子どもの事実から出発して総合学習に取り組んだ実践例である。「はじめに子どもありき」を合言葉に、長いスパンで子ども達の姿を見ていき、T・Tなどの個に応じる手だてを



使いながら総合学習を進めていくことを、スナネズミの実践例をもとにして話していただいた。指導助言の奈須先生からは、小学校教育を子育てのイメージで捉えること、学習論を変えて「はじめに子どもありき」で行くこと、自分のやりたいことを探すことそのものが、総合であることなどを話され、参加者への実践の足がかりとしていただいた。（中田 泰志・埼玉）

○中学校分科会

協力校

愛知県大府市立大府中学校（成田 幸夫）

千葉県八千代市立阿蘇中学校（松本 光弘）

助言者

浅沼 茂（東京学芸大学助教授）

成田 幸夫（愛知・大府中 教頭）

司会

植田 由紀（千葉・八千代市立高津中）



中学校分科会は、植田由紀先生の司会により、千葉の松本光弘先生と愛知の成田幸夫先生による資料提供によって話が進められた。本分科会には、高校の先生も何人か参加されていたが、中学校だけの部会のように案内が行っていたので、もし、中学・高校部会として案内があれば、もっと参加者が増えただろうとの話であった。

初めは、松本先生から、取り組みの初段階において課題選択型のチームティーチングを実践し、総合学習の方向へつなげることができるとい見通しについて話があった。

次に、成田先生から、上野中学校での実践から、総合学習の可能性について年間計画を含め、学校全体の取り組みが必要であることが明らかにされた。例えば、多くの場合死んでしまっている図書室は、資料室として探究学習の場として生まれ変えられるし、ボランティアは、生きた社会勉強となっている。また、学校行事は、総合学習の格好の機会を提供している。

例えば、卒業式は、生徒が主役の親との対話

の場として生まれ変わるといように、実践から実例を挙げての話は、説得力のあるものであった。

中学校での総合学習についての多くの誤解は、教師自身も持っている教科中心の学習観に原因がある。教科学習が子ども自身の学習のニーズと社会のニーズにどれだけ応えているかということと考えたとき、中学・高校においてもまさに総合学習が必要とされていることが理解できるのである。（浅沼茂・東京）

講演①

「教育課程の改訂と総合学習の可能性」

お茶の水女子大学教授 無藤 隆

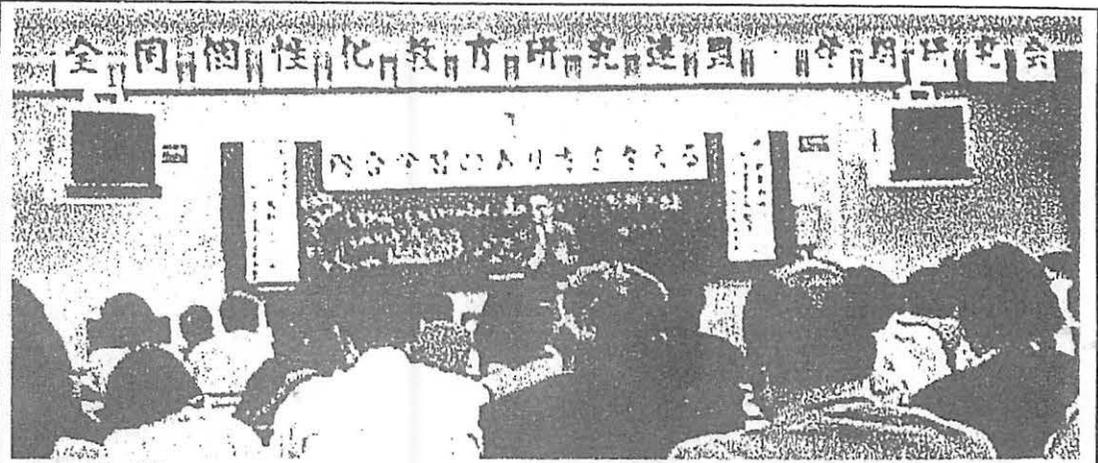
無藤先生は、教育課程審議会委員でおられる。講演では、審議会の話などもおりまぜながら、改訂のねらいや総合学習の進むべき方向をわかりやすく述べられた。

まず、教育課程の動向として、基本的には、現在の教育課程のねらいと大きな違いはないものの、学習指導要領は、学校の創意が生かせるよう、より大綱化したものにしていく必要がある。また、総合学習が、例示（国際理解・外国語会話、情報、環境……）に縛られてはならないことを強調された。さらに、教科での「学び」総合での「学び」の違いについて、講演を進め、特に総合学習では「学びの姿勢」をつくっていくことの必要性を説かれた。

また、総合での問題解決学習では、問題が子どもの体験から成立したもので、教師から主題が提示されたものでも、教師は、プロセスの中で子どもの姿容（問題の個人的文化的発展の可能性）を見ていく必要がある。そして、総合学習では、「問題に取り組むことで新たに見えてくるもの（本物・リアリティ・社会的実践・問題の社会性と広がり）に価値がある。」のであって、答えを出すことがねらいではないとまとめられた。（松浦盛人・埼玉）

学びのあり方を考える



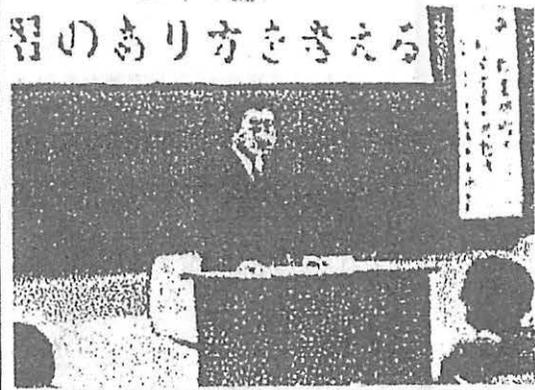


講演②

「総合学習をどのように展開したらよいか」
 愛知県大府市立大府中教頭 成田 幸夫
 総合学習に取り組んできた長い実践経験をもとにこれから総合学習に取り組もうという人にもわかりやすい話であった。

・氏が総合学習を含め現場で実践をするうえで一番危惧していることは、教育界の急速な変化に教師はついていっているのか、ということであった。15年前合科はゆるされるが、総合はするされないとされていた。それが、今はどこもかしこも総合、総合である。これからどうなっていくかまるで見通しがたたない。

そんな中で何をよりどころに研究していくかとなると子供をどうしたいか、どんな力をつけるためにこの学習をするか、ということである。



(事務局への問い合わせ・連絡先)
 〒115-0044東京都北区赤羽南1-16-2-504
 03-3903-4780 庶務部長 佐久間茂和

その育成すべき力とは、学力よりも学習力や能力であると述べられた。

(太田 始・東京)

まとめ

上智大学文学部教育学科教授 加藤 幸次
 いよいよ総合学習が導入されることになったが、総合学習は、教科と対立するものではない。それぞれの領域が有効にかかわりあったカリキュラムづくりをするべきであろう。

総合学習がめざす「生きる力」とは何だろう。教科の学力は測りやすいが、「生きる力」は見えにくい。最近、こんな二つの事例に出会った。縦割り活動で、6年生が修学旅行での自分の経験を下級生に話す。ペープサートや写真を使う等いろいろな工夫をしていた。今までの経験や学習の中で身につけてきた力を自分で構成して使っているのだ。また、中学生(加藤先生のお嬢さん)の自由研究。自分で決めた課題を調べ、自分の言葉でまとめることができ、学習のおもしろさを知ったようだ。これこそが「生きる力」ではないか。それは生きざまであり、人との関わりえもある。また、知的追求そのものでもある。

今までの教科でめざしていた「賢い子」とは「知的に優れた子」である。しかし、これからは、「知恵のある子」という意味での「賢い子」を育てることが目的となるであろう。

(安達 幸・千葉)

全国個性化教育研究連盟会報 第44号
 平成10年1月31日発行
 編集責任者 事務部長 高浦 勝義
 編集 広報部 太田 始